

平成 28 年度 重要文化財公開

首里城京の内跡出土品展

憧れの 青花



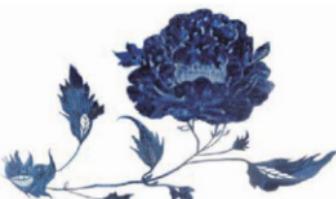
沖縄県立埋蔵文化財センター
2017年2月21日(火)▶5月14日(日)

目 次

ごあいさつ	1
首里城「京の内」とは	2
～憧れの青花～ 展示概要	3
第1章 青花の誕生—元代の青花—	4
第2章 京の内跡にみえる青花—明代の青花を中心にして—	10
第3章 青花に描かれる文様	12
コラム 京の内跡出土のベトナム産陶磁器	18
第4章 日本・沖縄の窯業への影響	19
首里城京の内関連年表	21
重要文化財指定基準 / 重要文化財指定の名称と指定理由	22
重要文化財首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	23
引用・参考文献	24

【凡 例】

1. 本図録は、重要文化財公開『首里城京の内跡出土品展 憧れの青花』(開催期間:平成29年2月21日から5月14日)の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 企画および図録原稿執筆は、大堀皓平(当センター主任)・金城貴子(同左)・南勇輔(同専門員)が担当しました。
3. 本誌掲載の写真は、過年度の首里城京の内跡出土品展のもののほか、一部を大堀・南が撮影しました。
4. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行)者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出典を明記してください。
5. 調査報告書に記載されている資料名と本図録に記載されている資料名が一部異なるものが存在します。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものです。
6. 本誌では、コバルト顔料を用いた陶磁器について、中国産・ベトナム産を「青花」、日本産を「染付」としています。
7. 首里城跡で出土した資料については、地区名のみを記載しています。



ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成12年6月27日に考古資料の部で国の重要文化財に指定されました「首里城京の内跡出土陶磁器」518点を所蔵しております。

これらは、平成6（1994）年度～平成9（1997）年度までの4年間に亘って実施された首里城京の内跡発掘調査において、同地区内の倉庫跡（1459年火災で焼失）より出土したものです。

出土した陶磁器は、14世紀中頃から15世紀中頃の中国、東南アジア、日本で生産されたもので、かつて中継貿易で栄えた琉球王国の繁榮ぶりを示す貴重な資料です。なかでも、14世紀初頭に出現したとされる中国産青花は、世界中の陶磁器に大きな影響を与え、今日に至るまで陶磁器研究の標準資料となっています。諸外国と盛んに交易していた沖縄では、中国を初め各地域の陶磁器がグスク時代・近世を通じて多く出土しています。

今年度は日本の磁器生産開始400年に当たり、沖縄も陶器生産のため薩摩から朝鮮人陶工を招聘して400年の節目になりますが、いずれにも中国産青花の影響を受けた製品がみられます。

そこで今回はこれらのルーツとなった中国産青花をテーマといたしました。京の内跡出土の中国産青花を中心に、その影響を受けて生産されたと考えられる肥前産染付、沖縄産施釉陶器、欧洲産硬質陶器も含めて展示することで今まで続く染付の歴史を紹介します。

また、このほど資料整理中に見つかった線刻石器や裏面に三日月文の入った「背^{せんこくせつき}上月^{みかづき}」と称される希少性の高い中国南宋錢「紹興元寶^{せうこうがんぱう}」も初めて公開いたします。

この企画展をとおして、重要文化財「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 附 一、金属製品、一、ガラス玉」に対する皆様のご理解が深まるとともに、大交易時代で栄えた琉球王国の特別な祭祀や儀式などを催した聖域「京の内」の新たな魅力に触れる機会となり、さらに、本県文化財に興味を持つきっかけともなれば幸いです。

平成29年2月21日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 金城亀信

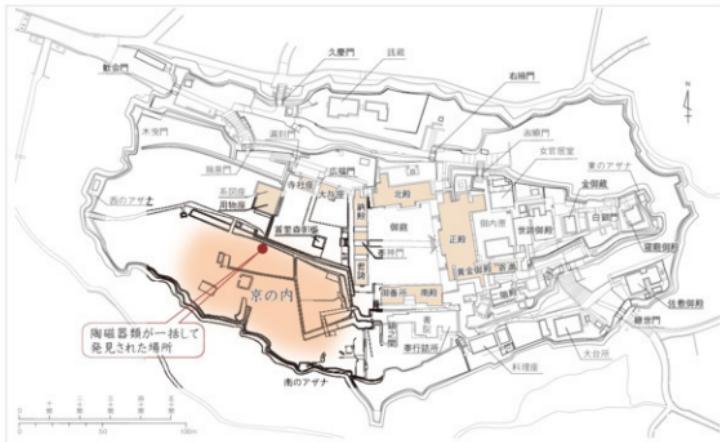
首里城「京の内」とは

首里城内は、政を司る正殿一帯と、国王のプライベート空間である御内原、聖域空間である京の内に大きく分けることができます。京の内は、首里城内の南西側を占める面積約5,000m²の区画を指します。

琉球王国の正史、『中山世鑑』に記されている琉球の創世神話によると、天上有住む天帝が琉球の創世神アマミクに指示し、國頭：辺戸の安須森から最良の聖地を求めながら南下しつつ、今帰仁カナヒャブ、知念森、斎場嶽、藪薩の浦原、玉城アマツヅ、久高コバウ森を巡り、そして首里城の首里森グスク、真玉森グスクの御嶽を創設するとともに、琉球の島々をつくらせます。

京の内は、アマミクが最後に降り立った場所とされ、琉球最高の聖域として認められた場所なのです。そのため、京の内の「京」は、靈力（セジ・シジ）と同義とされています。歴代の国王は、この最適の地に造った首里城を行政と祭祀の中心としました。

王府の神女・女官関係の文書がまとめられた『女官御双紙』には、首里城内に10箇所の御嶽があるとされています。これらは城内の東西南北、南東、南西、北東、北西のほか、上下に配置されており、ありとあらゆる方向の守りとしたことが考えられています。これらの御嶽において、祭祀を司る多くの神女たちは、その靈力により国王が永く優れた存在として長寿が得られるよう祈りました。この様子は、『おもろさうし』の中でうたわれています。



首里城平面図

横内家資料平面図(明治初期)をトレース・加筆

～憧れの青花～ 展示概要

首里城京の内跡からは膨大な量の陶磁器が出土しており、これらは琉球王国の繁栄を示す貴重な資料として重要文化財に指定されています。その公開にあたり、今回は京の内跡及びその他首里城内から出土した中国産青花とこれをモデルとした各国の陶磁器を取り上げます。青花が中国でどのように生産が始まり発展したのか、またそれに憧れた周辺諸国の青花模倣の技と工夫を紹介します。



京の内跡出土陶磁器



首里城京の内跡全景

第1章

青花の誕生 —元代の青花—

元代の14世紀前半頃、中国江西省にある景德镇窯では、白磁胎に酸化コバルト顔料で文様を描く青花磁器（青花）の生産が本格化します。青花成立の背景には諸説ありますが、西アジアで産出した酸化コバルト顔料の使用や、イスラーム地域の陶器や金属器と共に通する器形の製品が多数みられることなどから、西アジア地域より様々な影響があったものと考えられます。



沖縄出土の元代の青花

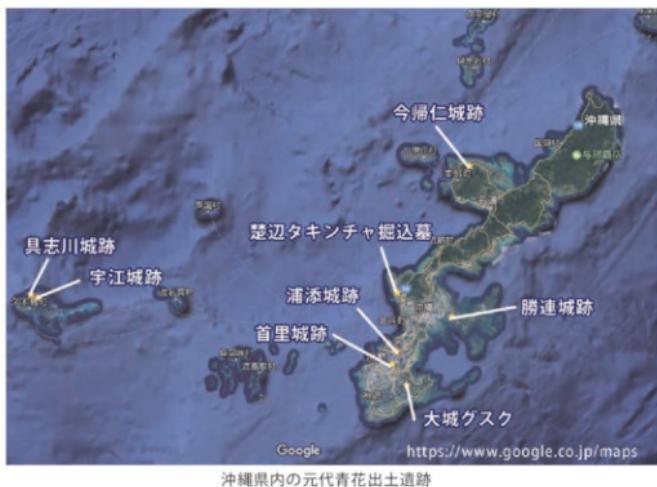
元代の青花は、西アジアや東南アジア地域を除くと、現在確認されている資料数はとても限られます。専修大学名誉教授の故亀井明徳氏らの研究チームによって確認された元代の青花は、日本国内では、国際貿易港であった博多等の20遺跡で186点（推定41個体）ですが、沖縄県内では8遺跡、1122点（推定153個体）も確認されています。

	遺跡	酒会壺	盤	皿	鉢	碗・杯	高足杯	梅瓶	長颈瓶	香炉	片口	器台	ごうす 合子	粗製品
日本	20 [41]	5 (98) [5]	6 (7) [6]	1 (1) [1]	1 (1) [1]	2 (3) [2]	0 [0]	5 (19) [5]	13 (31) [13]	0 [0]	3 (4) [3]	3 (20) [3]	0 [0]	2 (2) [2]
沖縄	8 [153]	27 (738) [34]	33 (174) [54]	1 (2) [1]	4 (9) [4]	11 (38) [21]	6 (12) [6]	6 (23) [13]	10 (65) [15]	2 (8) [2]	0 [0]	0 [0]	1 (47) [1]	2 (6) [2]
総個体数	[194]	[39]	[60]	[2]	[5]	[24]	[6]	[18]	[28]	[2]	[3]	[3]	[1]	[3]

括小個体数、〈 〉は破片数、〔 〕は推定個体数 単粗製品としたものには、様々な器種を含む

日本本土と沖縄諸島における元代の青花の出土遺跡数及び数量（亀井 2009 を参考に作成）

これらの遺跡の性格は、いわゆる三山に関係するようなグスクやその周辺遺跡、海上交通の要衝である久米島のグスクなどがあり、当時の沖縄の状況を考える上でも重要な資料だといえます。



沖縄県内の元代青花出土遺跡

首里城跡から出土した元代の青花

県内で元代の青花が最も多く出土するのは首里城跡です。まずは、世界的にも貴重とされる京の内跡の資料を紹介します。

京の内跡出土の元代の青花



青花八宝文大合子

国内外にも類例が見つかっていない貴重な資料。合子は、オードブルを盛る器のように用いられていたと考えられている。



青花龍文高足杯　中国では類例があるが、日本国内では初めて報告された資料。この高足杯には三爪の龍が描かれている。

京の内跡以外から出土した元代の青花

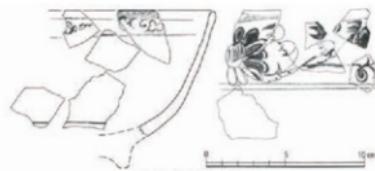
首里城跡では、京の内跡の他にも二階殿地区や奉神門地区、木曳門地区、御庭地区などから元代の青花が出土しています。これまでに確認されている製品には、最も出土数が多い盤をはじめ、酒会壺、瓶、碗、長頸瓶などがあり、様々な種類の青花がもたらされていたことが窺えます。



首里城跡出土の元代青花（二階殿地区、木曳門地区、奉神門地区等出土）



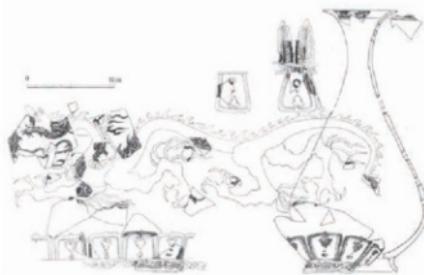
青花鉢
(奉神門地区・木曳門地区他出土)



実測図
(亀井他 2008 より引用)



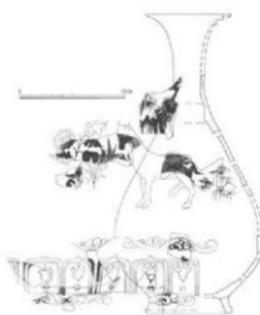
青花壺春瓶
(奉神門地区・木曳門地区他出土)



実測図
(亀井他 2008 より引用)



青花壺
(二階段地区他出土)

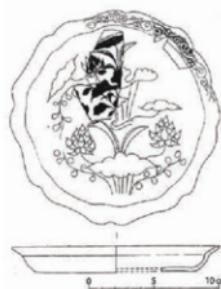


実測図
(亀井他 2008 より引用)



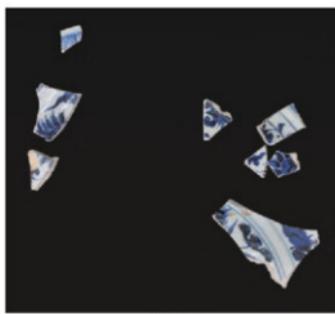
青花皿

(二階殿地区他出土)



実測図

(亀井他 2008 より引用)



青花皿

(二階殿地区他出土)



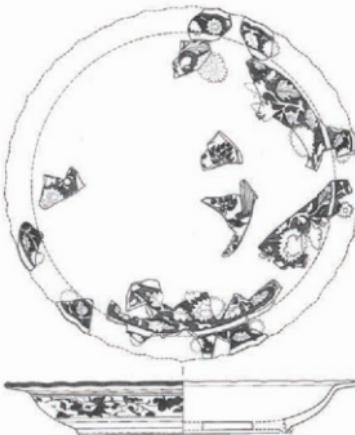
実測図

(亀井他 2008 より引用)



青花皿

(二階殿地区出土)



実測図

(沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 より引用)



青花梅瓶

(木曳門地区・奉神門地区他出土)



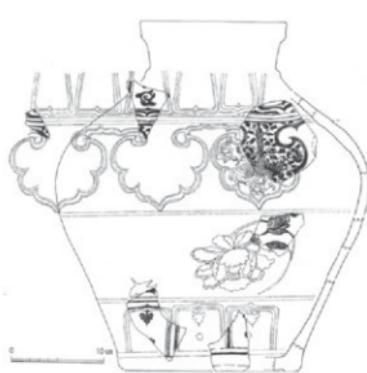
実測図

(亀井他 2008 より引用)



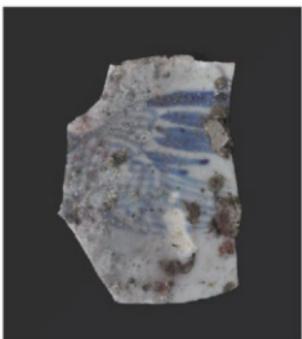
青花酒会壺

(木曳門地区・奉神門地区他出土)



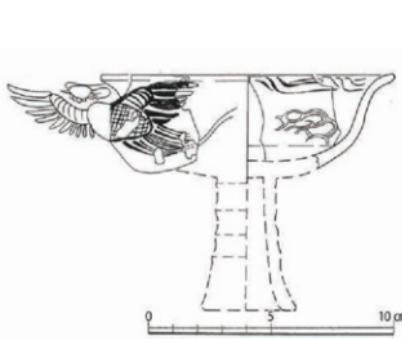
実測図

(亀井他 2008 より引用)



青花高足杯

(二階殿地区出土)



実測図

(亀井他 2008 より引用)

第2章

京の内にみえる青花 —明代の青花を中心に—

首里城京の内跡から出土した陶磁器類は、中国産を中心に、タイ、ベトナム、日本で生産された製品が含まれ、古くは14世紀中頃の製品もありますが、15世紀初頭～中頃の陶磁器が中心です。

今回のテーマである青花に注目すると、京の内跡からは中国産とベトナム産の青花がみつかっています。出土量が多いのは明代の中国産青花で、碗や皿、杯などの小型の製品から鉢、盤、瓶、壺などの大型の製品まで、様々な種類がみられます。

碗皿類は同じ種類・サイズの器がまとまって出土していることが注目されます。これらは食器として、来賓などを歓待する宴などに用いられたことが窺えます。そのほか、大型の瓶類は、器面全面に文様が描かれ、華やかな雰囲気を醸し出しています。これらは碗皿類に比べると出土量が少ないとから、空間を彩る機能も想定できます。



首里城京の内跡出土青花碗・皿類（一部、白磁含む）

京の内跡出土の明代の青花



青花壺



青花玉壺春瓶



青花花瓶



青花鉢



青花酒会壺・梅瓶

第3章

青花に描かれる文様

青花には植物、動物、人物や風景など、鮮やかで美しい文様が描かれていますが、その文様にはそれぞれ込められた意味があります。ここでは、青花の文様を持つ意味について紹介します。

【植物】

唐草

植物の茎、つるがからまりあった様子を描いたもので、途切れないことから子孫繁栄などの意味があります。時代や地域ごとに様々な描かれ方がされています。



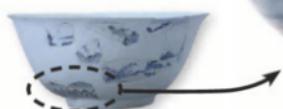
牡丹

中国で花の王様や富の象徴とされ、盛んに文様に使われるようになります。また、唐草文と一緒に描かれることもあります。



蓮

はす こうらくじょうど
仏教において極楽浄土を意味する重要な花で、青花以外の陶磁器にも多く用いられています。また、唐草のように様々な描かれ方があります。



動物

青花の文様には、空想上の聖獸を含め縁起が良いとされる様々な動物が描かれています。

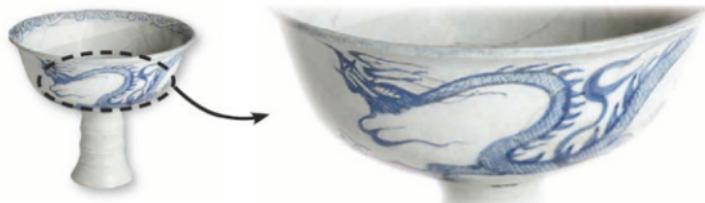
獅子

聖獸として西域（西・中央アジア）から中國に伝わったもので、邪氣を払う魔除けの文様とされています。



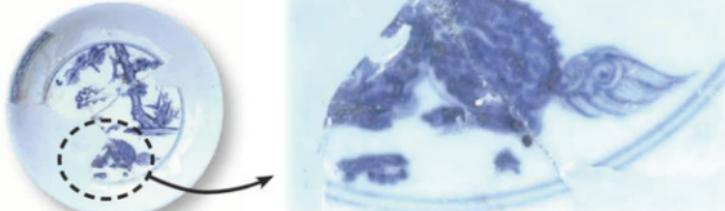
龍

天子（皇帝）を象徴する最高の吉祥とされた靈獸です。特に五爪の龍は天子にのみ許された文様のためか、京の内跡のものは三爪です。



麒麟

徳のある天子の治世に現れるといわれ、龍・鳳凰と共に靈獸として重要な文様です。



は う ぶ う

鳳凰

こきょう まこと ずいちょう
世の中の好况と幸福の前触れとされる瑞鳥で、モデルは孔雀とされていますが、時代によってモチーフは変化します。



馬

きば かいば ひば
馬は人が乗る騎馬や、波の上を走る海馬や飛馬として描かれます。左側の資料に描かれる馬は、騎馬の文様の一部と考えられます。



鳥

えん き
青花には様々な種類の縁起が良いとされる鳥が描かれます。メインで描かれるものもあれば、左の資料のように風景の一部として描かれる場合もあります。

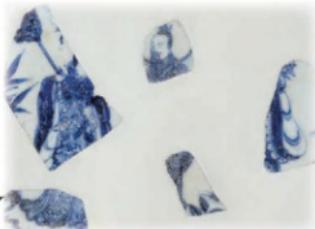


人物・風景

人物には、高貴な人物などの他に、仙人や仙女なども描かれています。風景には楼閣や山河などがありますが、戯曲の一場面が描かれることがあります。

貴人

この資料では、中央に元式の唐巾を被った貴人が両側に付人（仕女）を連れ立っている様子が描かれています。



仙人



雲下の樓閣



婦人



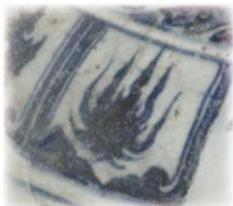
八宝文

チベットの宗教であるラマ教で吉祥とされる、法螺・法輪・宝傘・白蓋・宝瓶・双魚・盤長を配した文様。ただし青花では雑宝とされる文様が描かれることが多く、京の内出土青花にも雑宝が登場します。



火炎宝珠

願いの物を自由に出すことができる宝珠が燃え上がる様子を表した文様です。



珊瑚

モモロサンゴなどの宝石サンゴを装飾用に加工したもので、その美しさから重宝されていました。



陰陽板

八宝の一つ。道教における八人の仙人の一人である曹国舅を表した持ち物です。



厭勝錢

貨幣を文様にしたもので、富の多いことを祈願しています。



蓮華

仏教経典に基づいた吉祥文様の一つです。



その他

主役の文様として描かれる事は少ないので、メインとなる文様の周囲を飾るように配置されることが多いです。

らいもん

雷文

雷は雷雨が万物を潤すこと等から、良い兆しを象徴する文様として用いられています。



はとうもん

波濤文

波文には写実的な文様と抽象的な文様があり、両者を組み合わせて描く場合もあります。



よもだすきもん

四方襍文

器物の周辺に装飾として用いられた文様です。



れもべんもん

ラマ式蓮弁文

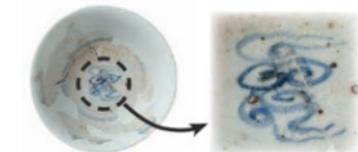
ラマ教の寺院の仏具関係に多く用いられる文様で、蓮弁の中にはさらに文様が描かれます。



くもん

雲文

器の内底などに単体もしくは、他の文様等と組み合わせて描かれます。時代によって書き方は変化してきます。



京の内跡出土のベトナム産陶磁器

京の内跡からはベトナム産青花も出土しています。中国産に比べると量は僅かですが、碗、盤、壺、壺、瓶、水注などがあります。中でも、瓶は丸みのある胴部に花弁を窓枠とし、その中に透かし彫りの文様を貼り付け、器表面全体に文様を描いた非常に精巧な製品です。また、水注は鳥や龍を象ったもので、類例は少ないとされます。これら京の内跡で見つかったベトナム産青花は、良質な製品がみられることが特徴的です。

これまでに沖縄県内では青花や白磁、色絵など、約450点を超えるベトナム産陶磁器が確認されています。これらは14世紀末～16世紀中頃の資料を中心です。中でも多いのが青花で、出土地をみると首里城及び周辺遺跡で最も多く、次に今帰仁城跡及び周辺遺跡、大城グスク、勝連城跡と続き、離島では久米島の宇江城城跡からも数点見つかっています。

かつて琉球はベトナムとの間に交易を行っていました。しかし、記録に残る交易は1509年の1回のみです。沖縄で出土するベトナム産陶磁器は14世紀末～16世紀中頃のものとふれましたが、発掘資料によって、琉球とベトナムとの間に文献記録には残らない複数回の交流・交易があった可能性が考えられます。



瓶



龍形水注

鳥形水注

京の内跡出土のベトナム産青花

第4章

日本・ヨーロッパ・沖縄の ようぎょう 窯業への影響

日本・ヨーロッパへの影響

日本では、1616年(元和2年)に肥前(現在の佐賀県)の有田で陶石が発見されたことを契機に磁器生産がはじまります。肥前産磁器は中国産青花などを積極的に模倣しながら生産技術を高め、中国の王朝交代に伴う動乱期である17世紀前半～中葉には国外にも輸出されるようになります。

一方、中国は17世紀前半～中葉こそ陶磁器の生産量が減少するものの、いわゆる明末清初以前の16世紀後半や、清朝が安定に向かう17世紀後半以降については、これまでと同様に陶磁器が輸出されています。特に16世紀後半からは、オランダ東インド会社によって歐州まで運ばれるようになります。輸出された青花をはじめとする中国産陶磁器は歐州の陶器生産にも大きな影響を与え、後に青花を模倣した製品が登場しました。



肥前産染付碗・皿（波順門東地区、管理用道路地区、円覚寺跡、中城御殿跡（旧県立博物館）出土）



肥前産染付変形皿（鍋島）（管理用道路地区出土）



オランダ産硬質陶器皿
(歓会門・久慶門地区出土)



裏銘

沖縄への影響

方言で「上焼」とも称される施釉陶器の中には、中国産青花や肥前産染付をモデルとして製作されたと考えられるものがあります。一般に沖縄で酸化コバルト顔料を本格的に使用するのは、1885年に大阪から化学合成された酸化コバルト顔料を輸入するようになってからとされますが、首里城跡などからは天然の顔料を用いたと思われる製品も出土しているため、沖縄における「青花」や「染付」の模倣は近代以前に遡るかもしれません。



左・中：中国産青花小碗
(鹿世門周辺地区、城郭南側下地区出土)
右：沖縄産施釉陶器小碗
(下之御庭地区出土)



左：中国産青花碗（湧田古窯跡出土）
右：沖縄産施釉陶器碗（円覚寺跡出土）



上段左・下段右：肥前産染付皿
(管理用道路地区出土)
上段右・下段中：沖縄産施釉陶器皿
(中城御殿跡（旧県立博物館）出土)
下段左：沖縄産施釉陶器皿
(管理用道路地区出土)

首里城京の内閣連年表

1400

室町時代	南朝時代	北朝時代	日本時代
第 二 尚 氏	明 一 尚 氏	第 一 尚 氏	京 の 内 の 遺 物
1350	1360	1370	南宋 元 祖 王 繩
1380	1390	1400	元 王 繩
1410	1420	1430	英 王 繩
1440	1450	1460	度 王 繩
1470	1480	1490	累 王 繩
1500	1510	1520	中 国・沖 縄 の 主 な 流 れ

重要文化財指定基準

○ 考古資料の部

重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鏡、銅劍、銅鑄その他の弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衛・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○国宝及び重要文化財指定基準、・(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会告示第2号)〔最終改正〕平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数: 沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所 有 者: 沖縄県(沖縄県立埋蔵文化財センター保管)

(庁保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成)

説 明 文: 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里當蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は靈力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である間得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6~7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に2点と景德鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が國中に充満する」(訳文の趣旨)とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、釭等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

(文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋)

※官報告示: 平成12年6月27日付け文部省告示第120号

※文化財保護法(昭和25年法律第214号)第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財 考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器

518点

附 一、金属製品 一括
附 一、ガラス玉 一括

重要文化財 陶磁器内訳

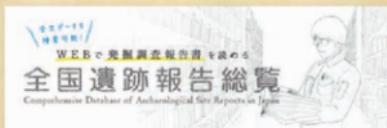
種類	器種:点数	器種:点数	器種:点数
青磁(289点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	大鉢 1
	碗 14	皿 11	杯 2
白磁(33点)	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付(2点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付(58点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵(3点)	碗 2	皿 1	
紅釉(1点)	水注 1		
瑠璃釉(2点)	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器(1点)	碗 1		
褐釉陶器(35点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	ふた蓋 1		
白釉陶器(3点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器(55点)	壺 55		
タイ産半練土器(22点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器(3点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか(本土産)(6点)	すり擂鉢 1	かめ甕 3	壺 2
瓦質土器(沖縄産)(5点)	蓋 5		
合計		518点	

《引用・参考文献》

- 愛知県陶磁資料館（編）2011『阿蘭陀焼 憧れのプリントウェアー海を渡ったヨーロッパ陶磁一』
- 新垣力 2000「モデルとコピーの視点から見た窯業開始期の沖縄」『南島考古』第19号
- 新垣力・仲座久宜 2015「琉球出土のベトナム陶磁」『昭和女子大学国際文化研究所紀要 14・15世紀海域アジアにおけるベトナム陶磁の動き—ベトナム・琉球・マジャバヒト—』Vol.21 2014 昭和女子大学
- 大橋康二 2004『世界をリードした磁器窯 肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005 新泉社
- 大橋康二 1988『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55、ニューサイエンス社
- 沖縄県教育庁文化課（編）1998『沖縄県文化財調査報告書第132集 首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡一二階段地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第29集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編）2012『重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展 東南アジアと琉球』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 亀井明徳 2009「日本出土の元青花瓷の諸問題」『亞州古陶瓷研究IV』亞州古陶瓷学会
- 亀井明徳（編）2009『元代青花白瓷研究』亞州古陶瓷学会
- 亀井明徳・柴田圭子・高島裕之・新島奈津子・山元文子 2008『日本出土の元青花瓷資料集成』『亞州古陶瓷研究III』亞州古陶瓷学会
- 九州近世陶磁器学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁会10周年記念一』九州近世陶磁学会
- 金武正紀 2004「沖縄から出土したタイ・ベトナム陶磁」『シンポジウム陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器—』東南アジア考古学会
- 佐賀県立九州陶磁文化館（編）2016『日本磁器の源流』
- 佐々木達夫 2015『中国陶磁 元青花の研究』高志書院
- 視覚デザイン研究所（編）2000『日本・中國の文様事典』株式会社視覚デザイン研究所
- 中沢富士雄・長谷川祥子（編）、長谷部楽爾監修 1995『平凡社出版 中国の陶磁 8 元・明の青花』平凡社
- 那覇市立壺屋焼物博物館（編）2013『Okinawa Blue & White—沖縄が愛した青と白—』
- 町田市立博物館（編）2013『開館40周年・日本ベトナム外交関係樹立40周年記念—舛田コレクション—ベトナム陶磁の二千年』町田市立博物館
- 弓場紀知 2008『青花の道 中国陶磁器が語る東西交流』NHKBOOKS1104、日本放送出版協会

ごあんない

これまでの「首里城京の内跡出土品展」展示図録は、
下記のホームページよりご覧いただけます。



URL <http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

※サイト内の日本地図より、沖縄県をクリック

沖縄県立埋蔵文化財センター

平成 28 年度重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

「憧れの青花」

発行日：平成 29（2017）年 2 月 21 日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

H P <http://www.pref.okinawa.jp/edu>



関連行事のご案内

予約不要 参加無料

① 文化講座

日 時：3月 25 日(土) 13:00～16:00 (開場 12:30)

会 場：当センター研修室 定 員：先着 140 名

(プログラム)

「首里城京の内跡出土の青花について」

金城 龜信（沖縄県立埋蔵文化財センター所長）

「青花の出現と展開について」

森 達也（沖縄県立芸術大学全学教育センター教授）

「青花が日本に与えた影響について」

野上 建紀（長崎大学多文化社会学部准教授）

② ギャラリートーク

日 時：企画展開催中の毎週土曜日 (3/25 を除く)

14:00～14:30

会 場：当センター企画展示室 解説：当センター職員



沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL : 098-835-8751

【開所時間】午前 9 時～午後 5 時 (入所は午後 4 時 30 分まで)

【休 所 日】月曜日、国民の祝日（子どもの日、文化の日を除く）

年末年始、慰靈の日（6月 23 日）

辛月曜日が祝日の際は、翌火曜日も休所

入所無料

